

ギリシア・ローマ世界の中のエジプト

——プトレマイオス王朝からローマ属州へ——

アラン・K・ボウマン（高橋亮介訳）

近東世界におけるヘレニズム・ローマ時代は、アレクサンドロス大王の死によって始まり、政治体制の変遷について実りある研究対象となる。この時代の事件史を扱う歴史叙述は、アレクサンドロスの後継者たちの抗争が引き起こした侵略、征服、併合、そしてヘレニズム諸王国を軍門に下していくローマの進出に重きを置きがちである。これらの事件はもちろん重要であるが、これらの出来事だけで歴史が成り立っているわけではない。政治体制の変化によって引き起こされる征服や併合に先立ち、政治、外交、文化、あるいは経済的な交流がしばしば生じ、大規模な人口移動や「植民活動」も時折起こっている。したがって、事態は単純ではなく、政治的な変化の陰で目立たずにゆっくりと広まった影響の重要性が強調されなければならない。例えば、アレクサンドロス以前の近東の各拠点におけるギリシア人の存在の重要性を指摘したり、ローマ帝国の拡大を「友邦、盟邦 *socii et amici*」（従属国）への覇権から直接的な帝国支配への移行として語ることが出来る。このような大きな歴史の流れの中で、個々の地域や事例は独自の分析と叙述を要し、固有の政治構造をもつのである。

古代近東世界の中でも、「長期持続 *longue durée*」に基づく安定した国家であると安易に考えられてしまうのが、エジプトであろう。「農耕の開始の古さと、毎年のナイルの氾濫によって甦る驚くべき肥沃さから、自らの手で運命を変えようなど思いもよらない農夫たちが暮らす、時の流れを知らない不変の大地という『永遠のエジプト』なる現代の神話が創りだされたのである」¹。たしかに、自らの日々の糧を得ることも税を納めることもできないと、ギリシア語で綴ったパピルス紙の嘆願書を差し出す人々の言葉は、「ギリシア・ローマ時代」と言われる千年強の間（前 332-後 642 年）、ほとんど変わることはない。記念碑に刻まれた様々なテキストは、エジプトの伝統の中で、政治権力と支配権を表わす図像と密接に関わっているが、非専門家の目には、驚く程長い間、すなわち初期王朝時代から 3 世紀半ばまで、一定で変わることがないように映る。これらのテキストは画一的な図像の中に書かれ、ルクソールやカルナックにあるファラオ時代に建てられた神殿のヒエログリフのテキストや図像と、フィラエ、デンデラ、エドフ、エスナにある「ギリシア・ローマ時代」の神殿のものとを識別するためには、専門家の助けが必要となる。そして「ギリシア・ローマ時代」の間にも、アレクサンドリアに居をおくマケドニア人の王たちから、総督を代理人とするローマ皇帝へと支配者が変わり、統治の本質が変化したにも関わらず、この慣習は一見、変化しなかったようである。現在の記念碑の状態から変化を見て取ることは難しく、誤った印象を受けやすい。例えば、ガードナー・ウィルキンソンの水彩画がなければ、ローマ軍の兵士と紫衣に身を包み後光をもつ 4 人のローマ皇帝の行進を描いた、300 年頃のフレスコ画がルクソール神殿にあ

¹ Bowman and Rogan (eds.), *Agriculture in Egypt from Pharaonic to Modern Times*, Oxford, 1999, p. 1.

ったという記録を、我々は持ち得ないのである²。

歴史の継続性という印象は、歴史を静的なものとして捉えるエジプトの歴史叙述の特徴に帰することもできる。アラン・ロイドが示したように、エジプト人の意識の中では、世界の秩序が一定不変であったことを強調するために、歴史的背景は捨て去られてしまうのである³。年代順に書かれた歴史叙述の作成は、プトレマイオス朝期のギリシア人の要請によるもので、セベンニュトスのマネトンが書いた王朝の変遷は現在でもなお用いられるが、紀元前4世紀末から前30年までのプトレマイオス朝の王と紀元3世紀末までのローマ皇帝は、権威と安定を印象づけるという自明の理由から、古来の伝統に則って自らを表現しつづけたのであった。

軍事的な侵略と征服を過度に強調する史料があるにせよ、イスラームの侵入以前の千年の間にエジプトが経験した政治体制の根本的な変化と、地中海および東方の近隣諸国に対するエジプトの役割や関係の本質的な転換を示さない史料に惑わされないことが重要である。表象と現実、および継続と変化のコントラストが、この時代の変容における重要な特徴である。紀元前1世紀にプトレマイオス朝の王からローマ皇帝へと支配者が交代した時期は、補完的あるいは併存する文字史料と図像史料、および以前の政治的な変化から得られた示唆的な指標でもって、支配体制の変化を検討する機会を提供してくれるのである。

1. ペルシア帝国およびプトレマイオス朝支配下のエジプト

エジプトは、末期王朝時代に二度にわたりアケメネス朝ペルシアの支配下に入り、第二ペルシア支配期（前343-332年）は、アレクサンドロス大王の侵攻とその後継者プトレマイオス一世ソテルによるエジプトの支配権の奪取によって終わった。第一ペルシア支配期（前525-399年）において、とりわけ在地神殿の略奪とエジプトの宗教への敵意ゆえにカンビュセス大王の評判は極めて悪い。しかし、カンビュセスへのこのような評価の多くは、ギリシア・ラテン語叙述にみられ、エジプト語史料による評価はより曖昧であり、カンビュセスが伝統的なファラオの役割を担ったことを示唆する。ともかく、ペルシアの支配者とエジプトとの敵対もしくは協調関係の焦点となったのが、宗教秩序と聖職者である。アラン・ロイドの論じるところでは、敵対関係は「カバッシュ」なる謎の人物に示され、協調関係はウドジャホレスネトの碑文に表明されている⁴。プトレマイオス一世が立てた有名なサトラップ・ステラ（前311年）は、エジプトをペルシアの圧政から解放した功績を誇っており、ペルシアの侵攻を無秩序、戦乱、宗教秩序の混乱とみなす史料は他にも存在する⁵。カンビュセスのエジプト侵攻の話は、千年以上も後に、ペルシア人（ササン朝）が10年間ほど再びエジプトを手中に収め、古い反ペルシア感情が再燃した時に、ペルシアに抵抗する勇敢なエジプト人についてコプト語で書かれた物語という形で、「プロパガンダ」として甦ったかもしれない。そして、20世紀の高名な

² Golvin et al., *Le camp romain de Louqsor (avec une étude des graffites gréco-romains du temple d'Amon)*, Cairo, 1986; A.K. Bowman, *Egypt after Pharaohs*, London and Los Angeles, 1996², fig. 34.

³ A.B. Lloyd, 'The Inscription of Udjahorresnet: A Collaborator's Testament', *The Journal of Egyptian Archaeology* 68 (1982), pp. 166-180, esp. 167.

⁴ Lyold, *op. cit.*

⁵ Cairo Egyptian Museum, CG 22182.

歴史学者 A.J. バトラーをして、侵略者たちの振る舞いを「狂暴な残虐さ」という言葉をもって描写せしめたのである⁶。しかし、バトラーは、ペルシア人の支配の実情を平穩にして寛容なものの特徴づけている。同様に、前 6-4 世紀のペルシア支配についても穏当な支配を示す事例がある⁷。暴力的な侵略最初期の後に、安定、継続、寛容が続くという一貫したパターンを見てとる傾向が近年の見解にはある。ここでアケメネス朝の支配からササン朝の支配までには、ノルマン人のイングランド征服（1066 年）から現在までとほぼ同じ時間が経過していることを強調しておくべきだろう。

それでも、プトレマイオス一世は、自らを暴政からの解放者とみなし、そのように喧伝することができたし、続く 300 年間に渡るギリシア・マケドニア人の支配は、在地の宗教権威の容認、言語使用における優位、新たな首都としてのギリシア都市の建設、ギリシア語を話すエリート階級の創設——これにより野心あるエジプト人の同化あるいは「ギリシア化」が促進された——などにより達成され、成功を収めた。反感や抵抗は、全くなかったわけでも見て取れないわけでもなく、散発的な在地勢力の反乱やテバイ周辺でエジプト人「ファラオ」の登場として現われたが、これらは概して不成功に終わったか、取るに足らないものとしてうまく処理されたのである。

いわゆる「土着勢力」による支配への回帰という、エジプト人の願望から書かれたのが、ギリシア都市アレクサンドリアの陥落とエジプト都市メンフィスの再興を予言する黙示文学である。これらデモティック（民衆文字）で書かれた文学がギリシア語に翻訳されて、紀元後 3 世紀に流布していたのは確実であるが、その起源は明らかに遙か古くまでさかのぼる。これらの黙示文学で強調されているのは、ギリシア人を「侵入者」と見なすエジプト人の視点である。アメンホテプ王の治世の出来事として書かれた『陶工の託宣』は、聖域で作業をしたがゆえに冒瀆罪に問われた陶工の話であり、彼の陶器が壊されたことは、（いずれは甦るが）エジプトの崩壊を予言するのである。

そして守護霊は、[ギリシア人によって] 建設された都市を去り、神の居わすメンフィスへ向かい、都市は見捨てられるだろう。災厄の終わりには、エジプトで異邦人が木の葉のように散り落ちる時がくるだろう... 守護霊はメンフィスに去り、この海に面した都市は、漁師が獲物を干す場となろう。そうして、そこを通り過ぎる人々は「これが人類のあらゆる種族が住んだ繁栄の都だったのだ」と口にするだろう⁸。

アレクサンドリアとエジプト、特に在地の宗教権威との関係は、第六次シリア戦争（前 168 年）に際して書かれ、ホルの文書群中に残る一文書に、より現実に近い形で見いだされる。この文書は、エジプトの伝統に則った形式と言語を用い、「ファラオ」であるプ

⁶ H.L. Jansen, 'The Coptic Story of Cabmyse's invasion of Egypt', *Avhandlingar utgitt av der Norske Vindenskaps-Akademi i Oslo. II. Hist.-Folios. Klasse*, no. 2, 1950; A.J. Butler, *The Arab Conquest of Egypt and the Last Thirty Years of the Roman Dominion*, 1978² (revised by P.M. Fraser), Oxford, p. 89.

⁷ A.B. Lloyd, 'The Late Period (664-332 BC)', in: I. Shaw (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, 2000, p. 383.

⁸ *P.Oxy.* XXII 2332, 50-62. L. Koenen, 'The Prophecies of a Potter: a Prophecy of World Renewal becomes an Apocalypse', in: D.H. Samuel (ed.), *Proceedings of the Twelfth International Congress of Papyrology, Ann Arbor, 13-17 August 1968*, Toronto, 1970, pp. 249-254; A.B. Lloyd, 'Nationalist Propaganda in Ptolemaic Egypt', *Historia* 31 (1982), pp. 33-55.

トレマイオス六世フィロメトルに宛てて書かれたものである⁹。エジプトにおける——正確にはエジプトに「おいて」ではなく、「接する」であるが——アレクサンドリアの特殊な地位ゆえに、エジプトと前322年以降の外部からの侵入者あるいは帝国支配権力との関係は、二者関係ではなく、常に在地エジプト人、ギリシア・マケドニア人、外部勢力の三者関係となっていたのである。

2. カエサルとその後継者たちとエジプト

ローマがエジプトを支配下におく過程を、単にカエサルの来訪（前43年）から、アクティウムの海戦を経て、アレクサンドリアの陥落（前30年）へと至る事件史として語ることは出来ない。エジプトであれ他の場所であれ、ローマは、属州ではない「友邦・盟邦」に対しても権力を行使した。これによって、しかるべき時になされる併合が容易に成し遂げられたのである。プトレマイオス朝は、「在地の抵抗勢力」という国内の脅威ではなく、外部勢力であるセレウコス朝によって時折もたらされる深刻な脅威と王家の中で繰り返される内訌ゆえに、紀元前2、1世紀には、その存続と安定のためにローマに従属していた。このような脅威に対してローマの仲裁に頼ったのは、エジプトだけではなかったが、ライバルあるいは自らの命を狙う一族の干渉を断つために、自らの王国をローマに譲渡しようとした最初の王がプトレマイオス八世であった（SEG IX 7:前155年）。それから15年と経たないうちに、アレクサンドリア近くの岸辺で、セレウコス朝にエジプトから手を引かせる交渉に成功したのは、ローマの将軍であった（Polybius 29.27:前168年）。

100年ほど後に同じくアレクサンドリア近くの岸辺で起こった、共和政ローマの歴史における、もう一つの重要な出来事は、ローマにとってのエジプトの重要性を際立たせる。前48年、カエサルとの抗争の果てに、ポンペイウスがこの地で没したのである。ポンペイウスがエジプトに姿を現したことは、エジプトが過去20年に渡り、ローマの東方政策の鍵として、元老院での重要議題となり、また有力政治家、とりわけポンペイウス自身の関心の的であったことをよく示している。前60年代までにプトレマイオス十二世アウレテスの地位は、元老院の承認に依存したものになっており、この承認は50年代にも重要でありつづけたのである。

ポンペイウスの死後、我々が知りうる史料は、有名な出来事と人物、すなわち、カエサル、クレオパトラ、アントニウス、オクタウィアヌスの動向に集中している。彼らが活躍する時期について、真に客観的な歴史叙述は望み得ない。というのも、カーペット——おそらく寝具袋の方がより正確であろうが¹⁰——の中に忍び込んでカエサルの前に姿を現したクレオパトラという、プルタルコスが伝え、エリザベス・テイラー主演の映画で印象的に再現された有名なエピソードで始まる色恋沙汰でもって、この時期が語られるからである。クレオパトラがいたのが寝具袋の中だろうとカーペットの中だろうと、

⁹ J.D. Ray, *The Archive of Hor*, London, 1976, no. 2; Bowman, *Egypt after Pharaohs*, p. 32. ホルは、メンフィスのイビスの聖域に住んだ神官および書記で、エジプトがセレウコス朝の侵攻から免れるという予言を夢の中で授かったことを報告している。

¹⁰ J.E.G. Whitehorne, 'Cleopatra's Carpet', in: I. Andorlini et al. (eds.), *Atti del XXII Congresso Internazionale di Papirologia, Firenze, 23-29 agosto 1998*, Vol. 2, Florence, 2001, pp. 1289-1293.

カエサルとナイル河遡航の旅を終えた後、彼女の妊娠が明らかになり、その子はカエサルの子とされ、カエサリオンと名付けられた。

周知のように、カエサルが暗殺された時、クレオパトラはローマに滞在していた。後に起こった出来事を考えると、彼女の滞在を根拠にして、二人の結婚、そして王朝と呼びうるものの成立が差し迫っているという噂が立つのは避けられなかっただろう。前44年3月15日のカエサル暗殺以前に、そのような噂が流布していたという明白な証拠はないが、3年後の前41年に公布された勅令においてカエサリオンがクレオパトラとともに現れることは、王朝を意識したものと見なせるだろう(*C. Ord. Ptol.* 75-6)。この勅令に前文として付された書簡について、二つの重要な点を指摘できる。一つは、この勅令をギリシア語とデモティックで刻むべしとの指示があること(ただしギリシア語のテキストしか残存していない)。もう一つは、王名が、「女王クレオパトラ、女神にして父を敬うもの、そして王プトレマイオス、またの名をカエサル、神にして父を敬うもの」となっていることである(ちなみに、カエサリオンとはキケロがつけたあだ名である)。このような王名の現われ方は一時的なものでしかなく、後の文書にはクレオパトラが単独で現われていることが、しばしば指摘されているが、前36年まではプトレマイオス朝の先例に倣い、二人が共同統治者として現れるのである。この時点まで、ローマと亡き——そして神となった——ユリウス・カエサルとのつながりは、大衆に対して喧伝するに値すると考えられていたようである。だが前44年の時点では、クレオパトラが、ローマの庇護下にある王が当然するであろうことを、確かな決意を持ち、また周到に準備をして行ったと考える方が現実的であろう。すなわち、クレオパトラは、ローマ元老院と国民の「友にして同盟者」として、独裁官カエサルからの恩恵を保証してもらうためにローマに赴き、「平穏な生活」を期待したのであろう。

クレオパトラは、同じ試みを前30年代にも行ったが、今度はアントニウスから利益——基本的にはカエサルのときと同様に互恵的ではあった——を得ようとしていた。フィクションで脚色されたストーリーの詳細はよく知られているので、ここで繰り返すまでもないだろう。もし、客観的に書かれた史料があれば、アントニウスの振る舞いは、ローマの将軍が従属国での問題を扱う際に期待されるものの典型として描かれただろう。ポンペイウスという前例が、多くの人の記憶に新しかったのは確実である。もっとも、ポンペイウスの時には存在せず、現下の事態を複雑なものにしたのは、クレオパトラの子供たちであった。クレオパトラは、前47年頃にカエサリオンを産み、さらにアントニウスからも子供をもうけた。子供の存在は、王朝の形成をはっきりと予感させるものであった。王朝の成立は、プトレマイオス朝とエジプト人には十分に受け入れられえたが、オクタウィアヌスが遺言によってカエサルの養子となることや「神の子」の肩書きを使うことすら、世襲による王政の宣言と見なされたローマにおいては、到底受け入れられるものではなかった。

クレオパトラはプトレマイオス朝で初めてエジプト語を学んだ支配者と伝えられている(*Plutarchus, Ant.* 27)。またクレオパトラとアントニウスが、ギリシア(あるいはギリシア・ローマ)とエジプトの二つの異なる様式で描かれたことは、相手に応じて異なる表

現方法が採られたことを強調する¹¹。このことに何ら問題はない。プルタルコスとカッシウス・ディオが伝える前34年のアレクサンドリアでの有名な大盤振る舞いは、明らかにアレクサンドリアにいるか、ヘレニズム文化に馴染みのある人々に向けてなされたアピールである。ディオの記述(Dio Cassius 49.40-41)は、あたかもローマの凱旋式を思わせる描写で幕を開ける。銀貼りの台座の上にしつらえられた金貼りの椅子に座ったクレオパトラの前に、黄金の鎖で縛られたアルメニアの王族が引き出される。続いて領土の分割について述べられる。クレオパトラとカエサリオンが手にするのは、エジプト、キュプロス、リビア、そしてコイレ・シリアであり、プトレマイオスは、シリアとヘレスポントスに至るまでのユーフラテスの西側を、アレクサンドロス・ヘリオスは、アルメニアとインドに至るまでのユーフラテスの東側を支配する。クレオパトラ・セレネにはキュレナイカが与えられる。アントニウスは、この領土分割がローマ元老院で承認されるよう望むが、この案件がどれほど不評を買ったかを分かっていたアントニウス派の執政官、ソシウスとアヘノバルプスによって黙殺された、とディオは付け加える。

一連の出来事は、アレクサンドロスの帝国の再建というアントニウスとクレオパトラの野望を表わすものとして解釈されなければならない。とりわけ、アレクサンドロスによる宿敵ペルシア人の征伐を強調することで、エジプト内部にも特別な共感のようなものを実際に呼び起こしたかもしれない。上記の領土の大部分について支配権を主張することは、まったくのでたらめでないとしても、内実を伴わないものであった。だが、プルタルコスの記述の中に、ローマの大衆に示されたアントニウスの大義名分を見いだすことができる。「アントニウスは、恥ずべき行いをよい体裁に見せかけることには心得ていたので、ローマ人の支配は取ることに於いてよりも、与えることによって偉大さが明らかになり、多くの王を生んで後継者にすれば高貴な家柄が拡大されると言った」(Plutarchus, *Ant.* 36: 秀村欣二訳)。オクタウィアヌスを支持する立場から書かれた、この史料によって貶められるほど、アントニウスの言い分に信憑性がないわけではないだろう。このエジプト史の中で特異なエピソードは、古典文学とそれに続く西洋文学の伝統の中で頻繁に現われる。これらに文学作品において、さらにはエジプトを訪れた近代ヨーロッパ人——彼らのほとんど全てが「古典」文化を学んだか、「古典」文化に造詣が深かった——によって、エジプトがどの程度、ギリシア・ローマ人の視点をもって眺められていたかを考えてみることは興味深い。この視点が、寝具袋の中からクレオパトラが現れるエピソードとアレクサンドリアの宮廷でのオクタウィアヌスの描写について向けられるならば適切だが、ヨーロッパ人によるエジプトの描写の中には、ルイ＝フランソワ・カサスが描いたギリシア・ローマ風のいでたちの群衆を塔門の周りに配したデンデラの神殿のように不適切になされているものもある¹²。

オクタウィアヌス・カエサルはロマンスとは無縁の人物であった。前31年のアクティウムの海戦と翌年のアレクサンドリアの陥落を経て、エジプト問題は極めて効果的に処

¹¹ S.-A. Ashton, *Ptolemaic Royal Sculpture from Egypt: the Interaction between Greek and Roman Tradition*, Oxford, 2001, esp. pp. 30-32.

¹² カサス(1756-1827)は、1780年代にエジプトを訪れたフランスの画家。彼の描いたデンデラ神殿は以下のウェブサイトで見ることができる：

http://www.old-church-galleries.com/biog_2_Louis-Francois-CASSAS.asp.

理された。オクタウィアヌスの勝利は、数多くのいささか仰々しいやり方で祝われた。ロンドンにあるパピルスによってのみ知られる、作者未詳の『アクティウム戦讃歌 *Carmen de Bello Actiaco*』は、アポロン神に向けて次のように詠う。

アクティウムの主、海戦の主よ、カエサルの勲を記念し、彼の功名を見届け、その名が「時」の口の端にのぼるものよ。あなたの誉れのうちに、カエサル〔オクタウィアヌス〕は、「戦」の嵐と盾同士のぶつかり合いを鎮め、そこで公平なる「平和」の苦しみを断ち切り、ナイルのほとりの地へと喜んで赴いた。あたかも「自由をもたらす」ゼウスのように、法と秩序、そして繁栄の豊かさを携えて。ナイルは、豊かな実りをもたらす腕〔氾濫〕で、主人を歓迎し、その黄金色の腕で洗われる彼の妻〔たるエジプト〕は、戦争や争いもなく、「自由をもたらす」ゼウスがもたらす氾濫に身を委ねる。そして戦争と名のつくものは消え去った。クロノスの息子ゼウスたるアウグストゥスの勝利を司る、唯一にして、高貴な方、レウカスの主よ、万歳¹³。

有名な「ファルネーゼの皿 *Tazza Farnese*」は、ニルス（ナイル）、イシス、ホルス＝トリプトレモスの三神を瑠璃に彫り込んだ、アレクサンドリアで作られた皿である。これは、おそらくアクティウムの海戦後に作られたもので、新しい秩序への期待が込められている¹⁴。アクティウムにはニコポリス（「勝利の都市」）が建設され、そこにはアクティウムでの勝利とオクタウィアヌスの凱旋式の様子を、最高級のペンテリコス産大理石に彫り込んだ、見事なパネルが作られた¹⁵。前 30/29 年までに、オクシュリュンコスの神殿のランプ係たちは、ギリシア語で新しいファラオ、「カエサル、神の中の神」にかけて誓いを立てていたが、彼らの念頭にあったのはカエサリオンではなく、オクタウィアヌスであった（*P.Oxy.* XII 1453）。やはり前 20 年代に、三代目のエジプト総督ペトロニウスは、はるか南方まで軍を進め、プリミス（現在のカスル・イブリム）に数年間、軍隊を駐留させた。この地から初代エジプト総督コルネリウス・ガルスの手によると考えられている詩を、唯一伝えるパピルスが見つかっている¹⁶。ギリシア風に仕上げられた、とても有名で印象的なアウグストゥスの頭部の彫像も、どういいうわけか、さらに南のメロエに至る道で発見された¹⁷。これら全てのことから、ローマはプトレマイオス朝よりもはっきりと支配体制への同化を求めたようである。アクティウムについての詩は、300 年後に作られ、最近公刊されたオクシュリュンコス出土のパピルスから知られる地方行政官を讃える六脚韻詩と共鳴するものがある。

¹³ D.L. Page (ed.), *Greek Literary Papyri*, Loeb Classical Library, Cambridge, Mass./London, 1942, no. 113.

¹⁴ Museo Archeologico Nazionale di Napoli, inv. MANN 27611. L. Koenen and D.B. Thompson, 'Gallus as Triptolemos on the Tazza Farnese', *Bulletin of the American Society of Papyrologists* 21 (1984), pp. 111-156; Bowman, *Egypt after the Pharaohs*, fig. 40.

¹⁵ K.L. Zachos, 'The Tropacum of the Sea-Battle of Actium at Nikopolis: Interim Report', *Journal of Roman Archaeology* 16 (2003), pp. 65-92.

¹⁶ 彼の詩については、R.D. Anderson et al. 'Elegiacs by Gallus from Qasr Ibrim', *The Journal of Roman Studies* 69 (1979), pp. 125-155 参照。

¹⁷ British Museum GR 1911.9-1.1; Bowman, *Egypt after Pharaohs*, fig. 138.

カピトリウムのゼウスは、ついに人類を哀れみ、あまねく大地と海の支配権を、神のごとき皇帝ディオクレティアヌスに与えた。光なき場所で忌わしい枷につながれ、なお苦しんでいるもののために、彼は過去の苦しみの記憶を消し去った。今や父親は子供が、妻は夫が、兄弟は兄弟が解放されるのを、あたかも黄泉から日の光の下にふたたび戻ってきたかのように、目にする。都市の救済者である、[エジプト総督マルクス・アウレリウス・]ディオゲネスは、良き皇帝の恩恵を喜んで受け取り、労苦を忘れる喜び[おそらく免税の恩赦]を、諸都市へと速やかに知らせた。全ての土地は、黄金時代の光のもとにあるかのように、歓喜する。人を殺めることをやめた鉄の刃は、血に染まることなく鞘の中に収められる。[中エジプト]七州の管理官よ、あなたも、喜んで、皇帝の賜物を皆に伝えた。かつて、あなたがナイルのテバイの街を注意深く正しく治めた時にも、ナイルはあなたの寛大さを讃えた¹⁸。

はるか南方のローマ属州となりえたが実際にはならなかった地域に、アウグストゥスによって建てられ、地元の神マンデュリスに捧げられた、カラブシャの神殿がある。そのレリーフにローマ皇帝はファラオ時代の伝統に則って描かれている¹⁹。この表現は3世紀半ばまで神殿の目録に用いられ続け、最後の例はエスナの神殿で250年に描かれたデキウス帝である。人々に供犠と献酒を行い、神々に敬意を示すことを求め、それに対して供犠証明書 *libelli* を発行するという、反キリスト教的な趣旨をもつ、宗教心の公式な表明を初めて命じた皇帝の時に、カルトゥーシュの使用が中止されたことは注目に値する²⁰。ローマ人が意図的に在地の宗教組織を弱体化させていったという巷に流布している見方に反して、ケルトのドルイドのような少数の例外があるが、在地の宗教に対して相応の敬意を示すことは一般的であり、それぞれメンフィスとヘルモンティスの聖所において聖牛アピスとブキスの就任を描いた石碑に、ローマ皇帝の名はヒエログリフで記録され続けた。アンミアヌス・マルケリヌスが伝える、ティベリウス帝の養子ゲルマニクスがアピスの雄牛によって拒否されたというエピソード(Ammianus Marcellinus 22.14.7)は、ローマに対する反感を示すものとして確かに象徴的である。しかし、私見によれば、エジプト人がローマの侵攻に対して、ペルシアの侵入に比肩しうるほどの否定的あるいは敵対的な反応を示す証拠を多くは見いだせないのである。

在地の伝統に従って王権を描き続けながら、同時に、皇帝礼拝を含むギリシアあるいはギリシア・ローマ的な宗教慣行を実践することは何ら驚くべきことではない。3世紀初頭までに、ファイユームの州都であるアルシノエという大きな都市では、ユピテル・カピトリヌスの神殿が建てられるまでになっていた。特筆すべきは神殿の会計記録であり、これにはローマの暦（これは非常にまれである）とエジプトの暦の両方が用いられており、神殿にはカラカラ帝の巨大な彫像が置かれていたことが示され、また多岐にわ

¹⁸ P.Oxy. LXIII 4352.

¹⁹ H. Stock and K.-G. Siegler, *Kalabsha: der grösste Temple Nubiens und das Abenteuer seine Rettung*, Wiesbaden, 1965.

²⁰ J.R. Knipfing, 'The Libelli of the Decian Persecution', *The Harvard Theological Review* 16 (1923), pp. 345-390; J.B. Rives, 'The Degree of Decius and the Religion of Empire', *The Journal of Roman Studies* 89 (1999), pp. 135-154.

たるギリシアとエジプトの宗教慣行と崇拝の対象となった神々が言及されている²¹。このような現象は、しばしば「シンクレティズム」との関係で論じられるが、実際に我々が目にするのは、融合ではなく、諸要素が衝突することなく各々の独自性を保っている共存状態である。同じ頃、別の州都であるヘルモポリスにおいて、ローマ騎士の彫像の建立が行われ、またデモティックで書かれた法律集やエジプトの「恋愛」文学のギリシア語版が、すでに述べた黙示文学とともに読まれていたのである。

政治と支配者についてはこのくらいにしておこう。というのも数人の政治家や将軍の経歴や活躍を通してでは、帝国支配の成功を語りきることは出来ないからである。表面的な出来事の下には、複雑な構造的要因と活動があり、これらが非常に重要なのである。カエサル、アントニヌス、オクタウィアヌス／アウグストゥス、その後の皇帝たちは取るに足らない人物ではなかったが、それでも彼らは明らかに、ローマ帝国の支配の構造の中で動いていたのである。エジプト併合前後の数十年間における財政、軍事、社会問題へのローマの関与についての史料から、帝国支配の確立が単発の軍事行動や王国の併合といった出来事によって生じたのではないことが分かるのである。

3. プトレマイオス朝エジプトからローマ属州エジプトへ

ポンペイウスにとって、ファルサロスでの敗北後にエジプトに向かうことは、軍事的・戦略的に理に適っていただろうが、考えられる理由が明らかに他にもあった。前50年代のプトレマイオス十二世アウレテスの復位を特徴づけたのは、ローマへの多額の贈与——6000 タラントと 10000 タラントという額が伝えられている——であり、この贈与は、公に「ローマ元老院と人民」の「友にして同盟者」になるために不可欠なものであった。アウレテスの復位を実質的に保証したのは、ポンペイウスの友人にして支持者であるシリア総督ガビニウスで、彼は12年ほど前にポンペイウスに東地中海の海賊征伐の命令権を与える護民官立法を提案した人物である。アウレテスの死後、彼の遺言は署名され、ある意味ローマで承認され、そこに保管されていたが、やがてポンペイウスの手に渡った(Caesar, *BC* 3.108.6)。この遺言は、ローマの帝国支配と権力者の動向を左右する重要な鍵の一つとなった。さらに、クレオパトラと弟との王位争いの決着に、ローマの介入が必要であったことは、言うまでもない。このような理由から、ポンペイウスは、エジプトを重要な地盤と見なしていただろう。

ローマがエジプトから得る財政上の利益はすでに莫大なものであった。共和政末期の帝国支配の特徴として、個人の経済的利益と、属州や従属王国における公職や行政とを明確に区別できないことはよく知られている。前50年代における最も興味深いエピソードの一つとして、前55年から54年にかけての約18ヶ月間、ローマ騎士ラビリウス・ポストゥムスがプトレマイオス十二世アウレテスの財務長官 *dioiketes* を務めていたことがある。この注目に値する出来事については、ローマの法廷で苛斂誅求などの罪に問われたラビリウスのために、キケロが行った弁護演説 *pro Rabirio Postumo* から知ることができる。ラビリウスはエジプトの支配層と衝突し、投獄されたが、脱走しローマに逃げ帰った。自らの意向に添う人物が財務長官の任命されるように差配できたのは、明らかに

²¹ *BGU* II 362; cf. A. Lukaszewicz, *Les édifices publics dans les villes de l'Égypte romaine*, Warsaw, 1986, p. 173.

ポンペイウスであり、ラビリウスは、ガビニウスの友人であり強いコネを持っていた。ただし、彼はローマの官職を保持しない私人であり、はばかることなく財務長官のような地位に就くことができた。この裁判そのものが汚職、またはそれに由来する疑惑を醸し出す可能性があったことを示しており、ここでもやはり、公私の利益について明確な線引きは出来ない。このエピソードは、サルスティウスが『ユグルタ戦記』の中で生々しく語る、ユグルタ治下の従属国ヌミディアでのローマ元老院議員と騎士の贈収賄を連想させる。前2世紀後半のヌミディアで実際に何が起こったかよりも、サルスティウスが執筆を行ったのが共和政末期であったという事実の方が重要であろう。いずれにせよ、ローマ人はエジプトの財政に直接、関与できたのである。財務長官ラビリウスについては、10年ほど前に公開された新史料から興味深い一面が明らかになった²²。ヘラクレオポリスで見つかったパピルスに書かれた演説の断片は、「搾取のために、財務長官の下で働く者たちのうち最も有能な者たちの罷免を命じた」ポストゥムスなる人物に言及しており、これはラビリウス・ポストゥムスのことである。校訂者が提案したように、「搾取 ἀρπαγήν」という敵意をもった表現は、アレクサンドリアに由来しているのだろう。そうだとしたら、この演説は、ローマの政治家とアレクサンドリアのエリート層の間の緊張関係を示す重要な史料となる。この緊張関係は、ローマ人有力者の経済的な利益追求によってもたらされた脅威から生じたのであろう。しかし、常にそうであるように、本当に知りたいことは不確かなままである。

いわゆるクレオパトラ・パピルス(*P.Bingen. 45*)は、女王自身が署名したという解釈ゆえに注目を集めた文書であるが、この解釈はおそらく間違っている。クレオパトラが署名したにせよ、しなかったにせよ、文書の内容自体は、とても重要である。これは前33年に出された勅令で、エジプトに所領を持つ、ある人物に免税特権を与えたものである。この人物がローマ人の名前をもっていることは確実で、おそらくカニディウスと読める。彼は、アントニウス派に属し、前40年に執政官を務め、パルティア遠征とその前の時期に重要な役割を果たしたプブリウス・カニディウス・クラッススであろう。あるいはクイントゥス・カスケリウスかもしれない。もしフラウィウス朝期にキュレナイカで作られた碑文(*JGRR I 1029-30*)に現れる人物がアントニウス・カスケリウスであれば、クイントゥス・カスケリウスである可能性が高まるだろう²³。アントニウスの有力な配下への所領の下賜は驚くことではないが、ローマ人が自由に従属王国の富を手にすることができたという特徴がここにも見られる。

前30年のエジプト併合後にも、ローマ人は私人としてエジプトから莫大な経済的利益を得つづけたが、こうした利益の追求は、アウグストゥスによる慎重な管理、決定、制

²² *SB XXII 15203*; C. Balconi, 'Rabirio Pstumo dioiketes d'Egitto: prima testimonianza papiracea', in: A. Bülow-Jacobsen (ed.), *Proceedings of the 20th International Congress of Papyrologists, Copenhagen, 23-29 August 1992*, Copenhagen, 1994, pp. 219-222.

²³ クレオパトラの直筆署名だとの主張については、P. van Minnen, 'An Official Act of Cleopatra (with a Subscription in her own Hand)', *Ancient Society* 30 (2000), pp. 29-34; id. 'Further Thoughts on the Cleopatra Papyrus', *Archiv für Papyrusforschung* 47 (2001), pp. 74-80 参照。Van Minnen はローマ人の名前をプブリウス・カニディウスだと、Zimmermann はクイントゥス・カスケリウスだと考えている; cf. K. Zimmermann, 'Eine Steuerbefreiung für Q. Cascellius adressiert an Kaiserin', *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 138 (2002), pp. 133-139.

限の下で行われた。ただし、アウグストゥスがエジプトを私有地として扱ったということではない。かなりの土地が皇帝の財産となったが、リウィア、アントニア、マエケナスのような有力者の手に——完全な所有権を伴って？——渡った所領に言及する史料も数多く存在する。より小規模な経済活動も活発に行われた。アレクサンドリアで作られ、アブシールで発見されたアウグストゥス時代のパピルス文書群からは、ローマ支配の開始直後のアレクサンドリアでの商業活動についてユニークな側面が明らかになる(BGU IV 1050-1209)。この史料からは、兵士、皇帝家の解放奴隷および奴隷たち *Caesariani* の存在と、前 50 年代以来の有力なローマ人の解放奴隷や奴隷たちの関与を示唆する個人名とが確認される。彼らは、新たに帝国に組み込まれた属州での商業および金融活動に深く関与しており、このような人々が自由に属州に赴き、経済活動を行えたことは、ローマ化の重要な一面である。

併合前後のエジプト支配にとってローマの軍事力が極めて重要であったことは明白である。前 55 年以降に駐留したガビニウス部隊 *Gabiniani* と呼ばれたローマ人部隊の存在は有名で、『アレクサンドリア戦記』に記された戦闘の後に、カエサルが軍団を配置したこともよく知られている。併合後に、大規模な軍事衝突を除けば、どれほどの地域的な抵抗が生じ、さらにその中のどれほどがローマに報告されたかを疑問に思う人がいるかもしれない。しかし、私の考えでは、ローマの支配に順応するにせよ抵抗するにせよ、有力な地方勢力が存在する地域において、彼らの人脈に関する史料を見つけだし、ローマが彼らをどのように扱ったかを考察すべきだろう。

初代エジプト総督コルネリウス・ガルスは、彼の失脚の証左となる碑文によれば、「テバイの離反」に対して、二度の戦闘を 15 日の内に行い、「その離反の指揮官たちを捕えた」「五つの都市の攻略者」である²⁴。もし、この抵抗が地域的な権力構造と人脈に基づいて組織されていたならば、プトレマイオス朝期にこの地域で起こった「在地勢力の反乱」を思い出し、地方豪族に関する史料に目を向けることには意味がある。偶然にも、プトレマイオス朝末期からアウグストゥス時代にかけてのデンデラおよびテバイの地方豪族の家系に関して、価値があり、非常に興味深い史料がかなり存在している²⁵。最もよく知られているのは、カリマコスの家族であろう。テバイ地方でストラテゴス *strategos* (州長官) 職およびその他の職を務めた、この家族は、エジプトの画像で飾られているがギリシア語で書かれた碑文を残している。カリマコス家のような、いわゆる土着勢力出身のストラテゴスたちが残した碑文や記念碑からは、彼らが二つの文化の伝統的な様式に則ってギリシア語とエジプト語を用いて自己表現をし、また彼らの家族にはギリシア人の名前をもつものもエジプト人の名前も持つものがいたことが分かる。さらに、プトレマイオス朝末期にはストラテゴス職を世襲で務める傾向があった。例えば、プセノバステスの息子、パナスは、クレオパトラの治世下にヒエログリフで書かれた碑文に「高貴なる統治者、王の財務大臣、唯一の友、王に愛されし者、宮廷の寵愛者、軍団の大將

²⁴ E. Bernard, *Les inscriptions grecques et latines de Philae*, vol. 2, Paris, 1965, no. 128= ILS 8995.

²⁵ H. de Meulenaere, 'Les stratèges indigènes du Nome Tentyrite à la fin de l'époque ptolémaïque et début de l'occupation romaine', *Rivista degli Studi Orientali* 34 (1959), pp. 1-25; L. Moeren, 'Notes concernant quelques stratèges ptolémaïques IV: les Kallimachoi, famille de stratèges dans le Thébaïde', *Ancient Society* 1 (1970), pp. 9-24; H.-J. Thissen, 'Zur Familie des Strategen Monkores', *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 27 (1977), pp. 181-191.

軍(=ストラテゴス)」と記されている。彼の息子プトレマイオスの碑文は、ローマ帝国への併合からおよそ20年後を経た前13/2年にも、ヘレニズム時代の在地社会の伝統を表現しつつ、「ホロスの予言者、ハトホルの予言者、イヒの予言者、デンデラの神殿の神々の予言者、デンデラの主ハトホルと偉大なる女神イシス、そして偉大なるエドフのホルスの宝物庫の管理人」というような宗教上の称号も記されている²⁶。もし、ローマの支配が始まった時に武装反乱が起こったならば、土着のストラテゴスたちは、プトレマイオス朝のクレルコイや他の軍事入植者——彼らの称号や組織はエジプト併合後から10年、20年が過ぎても見られる——の力を利用できたのであろう。

もし、ストラテゴスたちが、プトレマイオス朝期になんらかの軍事上の責任や職権を持っていたならば、それらはローマのエジプト併合後に失われた。しかし、彼らは、エジプト全体で30強を数えた地方行政区(州 *nomos*)において、徴税と司法に責任を負う、地方社会の重要人物でありつづけた。しかし、ストラテゴスとなったエジプト人には、出身地以外の州でこの職を務めることが義務づけられたので、彼らの地方社会とのつながりは失われた。またローマの支配が始まってからしばらくの間、領域部 *chora* の州のストラテゴスの多くが、彼らの人名や来歴に基づいて判断する限り、アレクサンドリアの有力家族に属していたということも特筆すべきである²⁷。ローマ支配初期の地方社会におけるストラテゴス職の重要性を示すのが、22/3年にファイユームで作られたレトポリテス州のストラテゴスを顕彰するギリシア語碑文である。この碑文は、ヘレニズム時代の碑文作成の伝統にうまく位置づけられるだけでなく、顕彰理由を記した箇所、エジプトでは良き役人の条件として何が求められていたかをも示している。

〔彼は〕州の住民に対して常に熱心かつ慈悲深くありつづけ、とりわけ村の住民を善行によって絶えず導いた。裁きの場においては、常に公明正大で賄賂を受け取ることなく裁きを下し... 必要な時には細心の注意を払い、忍耐強く、遺漏なく水路を手入れし... 村の水路のために働いた者たちには、彼らが誹謗中傷から被害を受けないようにした上に、過去にないほど農作物が与えられるように取り計らい、さらに強制も不正もせず、公共のための負担を極めて正当に請け負わせ... 州の他の役人に対する村の負債を支払うことで、農民たちを容疑と負担がかからないように守ったがゆえに²⁸。

ブシリス村の住民によって立てられ、スフィンクスの近くで発見された、この碑文は、30年ほど前にデンデラで作られた、前述のギリシア語とエジプト語で書かれた碑文と対照的である。ここで顕彰されたストラテゴスの名前は、グナエウス・ポンペイウス・サピヌスであり、エジプト人の名前でもギリシア人の名前でもない。

²⁶ cf. L. Mooren, *The Aulic Titulature in Ptolemaic Egypt: Introduction and Prosopography*, Brussels, 1975, nos. 137 and 138; A.K. Bowman and D.W. Rathbone, 'Cities and Administration in Roman Egypt', *The Journal of Roman Studies* 82 (1992), p. 107.

²⁷ G. Bastianini and J.E.G. Whitehorne, *Strategi and Royal Scribes of Roman Egypt*, Florence, 1987; Bowman and Rathbone, *op. cit.*, pp. 107-127.

²⁸ SEG VIII 527 = V. Ehrenberg and A.H.M. Jones, *Documents of the Reigns of Augustus and Tiberius*, Oxford, 1976², 320a : 22/3 年。

ここで、帝国の他の地域でも見られた、ローマの支配を安定して維持するために機能した地方エリートの役割という、より大きく興味深い問題が関係してくる。ギリシア系移民と彼らに同化したエジプト人の融合集団がプトレマイオス朝期に出来ていたが、ローマ人は彼らの中から、「ギュムナシオンの階層」というギリシア的なエリート集団を、都市化が進む州都に創りだした。この州都エリートが地方都市の公職者や行政官の役割を担い、また後3世紀までギリシア都市国家の文化様式を、州都において建築・祝祭・地域的な慣習として具現化しようとしていたことは明らかである²⁹。これらの現象とよく調和するのは、いわゆるファイユーム・ポートレートである。この肖像画は、ローマ期エジプトの都市エリートたちが、どのように描かれないかと考えていたかを図像や言葉によって伝えてくれるのである³⁰。

彼らが生きた文化的アイデンティティの複雑さを正しく理解するためには、テバイに面したナイル西岸に位置するディール・エル＝バーリから見つかった副葬品——その一部は大英博物館のエジプト美術部門で人目を引いている——もある³¹。これらの副葬品とともに葬られた家族の中心人物は、ソテルと彼の三人の子供たち、ペテメノプイス（別名アンモニオス）、センスノス、そしてクレオパトラである。ソテルの父親の名はコルネリウスであった。副葬品の中には、デモティックが書かれているが、ギリシアの影響が明白な装飾をもつ棺の蓋が二つあり、またギリシア語だけでなく、ヒエラティック（エジプト語神官文字）による伝統的な追悼文で記念された埋葬者もいる。同様の現象はファイユームでも起こっていた。例えば、ギリシア人名をもつアルテミドロスの棺にはエジプトの図像が描かれ、同じくギリシア人名のエイレネのミイラにつけられた肖像画には、デモティックが書かれているのである³²。

ローマ期の葬礼美術が示唆するのは、ローマ支配下におけるエジプトの文化が複雑であっただけでなく、少なくともそこで暮らしていた人々にとっては活気に満ち、また様々な意味で自信に満ちた文化であったことである。ローマ人が属州に圧政をしき、破滅に追い込むほどの搾取を行ったという見解もあるが、それだけがローマ属州の歴史ではないのである。

²⁹ Bowman and Rathbone, *op. cit.*; A.K. Bowman, 'Urbanisation in Roman Egypt', in: E. Fentress (ed.), *Romanization and the City: Creation, Transformations and Failures*, Portsmouth, 2000, pp. 173-187.

³⁰ S. Walker and M. Bierbrier (eds.), *Ancient Faces; Mummy Portraits from Roman Egypt*, London, 1997. ファイユーム・ポートレートは、主にファイユーム地方で発見された、ローマ時代のミイラにつけられた被葬者を描いた肖像画である。

³¹ C. Riggs and M. Depauw, "'Sotermalia" from Dier el-Bahri Including Two Coffin Lids with Demotic Inscription', *Revue d'Égyptologie* 53 (2002), pp. 75-102. ソテルの棺は、British Museum EA 6705; Bowman, *Egypt after Pharaohs*, fig. 80.

³² アルテミドロスの棺はハワラで発見された: British Museum EA 21810. エイレネの肖像画の出土地は不明である: E. Doxiadis, *The Mysterious Fayum Portraits. Faces from Ancient Egypt*, New York, 1995, Plate 111, cf. p. 222b.

解説

著者のアラン・K・ボウマン教授は、1944年にイギリスのマンチェスターに生まれ、オックスフォード大学で古典学を学んだ後、1969年にカナダのトロント大学より博士号を取得した。マンチェスター大学の講師を務めたのち、1977年からオックスフォード大学で教鞭をとり、2002年にカムデン古代史教授(Camden Professor of Ancient History)に就任し、現在、イギリスを代表する古代ローマ史研究者の一人である。

『ケンブリッジ古代史 *Cambridge Ancient History*』の第二版のうち、前43-337年を扱う10,11,12巻(1996, 2000, 2005)の共編者および執筆者として広く知られているボウマン教授の専門は、属州エジプトとブリタニアから出土する記録文書史料 *documentary evidence* の分析である。博士論文に基づいた『ローマ期エジプトの都市参事会 *Town Council of Roman Egypt*』(Toronto, 1971)では、3・4世紀の都市参事会の実態を論じた。オックスフォード大学に所蔵されるオクシュリュンコス・パピルスの校訂を手がける一方で、エジプトの社会経済史、軍事史に関する論文を数多く発表し、ヘレニズム・ローマ時代のエジプトについての優れた概説である『ファラオ後のエジプト *Egypt after the Pharaohs: 332 BC-AD 642*』(Berkeley, 1987; 1996²)も執筆している。

またボウマン教授が、長年に渡り取り組んでいるのがイギリスのハドリアヌスの長城近くの駐屯地ウィンドランダから出土した木板の研究である。1975年よりデイビット・トマス David Thomas (元ダラム大学) と共にテキスト校訂を行い、『ウィンドランダ・タブレット *Vindolanda Tablets*』(I-III, London, 1983, 1994, 2003)を公刊し、また木板から明らかになるローマ辺境の様相を論じた『ローマ辺境の生活と書簡 *Life and Letters on the Roman Frontier*』(London, 1994; 2003²)を著わしている。

属州で発見される記録文書からローマ帝国のあり方を理解しようとするボウマン教授の視点は、教授就任演説「帝国の前哨地：ウィンドランダ、エジプト、そしてローマ帝国 *Outposts of Empire: Vindolanda, Egypt and the Empire of Rome*」(*Journal of Roman Archaeology* 19 [2006], pp. 75-93)や、2004年に立教大学で行われた国際シンポジウムでの報告「ローマ帝国における官僚制と文書」(後藤篤子訳、浦野聡・深津行徳編『古代文字史料の中心性と周縁性』春風社、2006年、69-92頁)からうかがうことができる。またグレッグ・ウルフ Greg Woolf (セント・アンドルーズ大学) との共編著『古代世界における識字率と権力 *Literacy and Power in the Ancient World*』(Cambridge, 1994)などから知ることのできる識字率への高い関心も、記録文書がローマ社会で果たした役割を理解するための試みとして理解できる。さらに1995年に創設されたオックスフォード大学古代文書研究センター *Centre for the Study of the Ancient Documents* の所長を務め、また現在は2005年から2010年まで行われるローマ経済に関する研究プロジェクト(*The Roman Economy Project*)の牽引役でもあり、研究組織のオーガナイザーとしても手腕を振るっている。

本論文は、クレオパトラの恋愛物語、あるいは共和政末期の内乱期の事件史として語られがちなローマのエジプト併合を、エジプト史あるいはローマの帝国支配の進展というコンテキストの中に位置づけて理解しようとするものである。本論文の概要は、以下

のようにまとめられよう。ペルシアの圧政からの解放者というプロパガンダを掲げ、エジプト支配を確立したプトレマイオス朝も、前2世紀以降、存続のためにローマに頼るようになる。エジプト問題に深く関わったポンペイウス、カエサル、アントニウス、オクタウィアヌスの行動は、共和政末期のローマと従属国との関係というローマ帝国の支配構造の中でとられたものであった。併合に前後してローマの軍事的・経済的な存在感が増し、ローマ支配下で地方エリートのあり方も変化する。さらにエジプト社会に流入したローマ文化は、属州住民によって受容され、既存のエジプトおよびギリシア文化と併存し、ローマ期エジプト独自の文化を形成したのであった。

叙述史料、碑文・パピルス史料、図像史料を縦横に駆使し、大きなスケールで語られる議論は、エジプトの史料とローマ史に精通した著者ならでの面目躍如であろう。またプルタルコス『アントニウス伝』など広く知られている史料も取り上げられているが、これまで専門家以外の目に触れることのなかったであろう史料も論じられており、ヘレニズム・ローマ期エジプトのもつ豊かな史料の一端を知ることができるだろう。なお多くの史料については、更なる個別研究の余地もあることを付言しておきたい。

訳出した論文は、ボウマン教授が2005年に来日した際に、東京（西洋古代史サマーセミナー、9月17日、於東洋大学）で行った講演 *Egypt in the Graeco-Roman World: from Ptolemaic Kingdom to Roman Province* の原稿である。なお、この講演原稿に加筆・修正を施した同名の論文が、*Regime Change in the Ancient Near East and Egypt: From Sargon of Agade to Saddam Hussein*, Oxford, 2007, pp. 165-181 に所収されている。翻訳にあたっては、若干の変更点を加味し、注を付ける際の参考にしたもの、加筆された箇所は翻訳には反映されていない。さらに、本翻訳のために著者から修正案を提案していただいた箇所も若干ある。記して謝意を表わしたい。